

第6回京都市産業科学技術推進委員会 議事要旨

(開催要領)

- 1 日時 平成22年12月16日(木) 14:00~16:00
- 2 場所 財団法人京都高度技術研究所 10F プレゼンテーションルーム
- 3 出席者 堀場委員長, 井村委員, 高木委員, 竹内委員, 細見委員

(議事次第)

- 1 開会
- 2 議題
 - (1) 京都市産業科学技術振興計画の進捗状況について
 - (2) 新・京都市産業振興ビジョン(仮称)について
 - (3) その他

(概要)

- 1 事務局から資料説明
配布資料について事務局から説明を行った。
- 2 意見交換

(京都市産業科学技術振興計画の進捗状況説明後の意見交換)

- 先端技術からアートや文化などの伝統産業, またその中間的なものとしてコンテンツ産業等について説明があったが, もっと先端性が感じられる内容にするべきである。配布されている科学技術のマンガ冊子も小学生が読むのであれば良いが, 知的クラスター創成事業や地域結集型共同研究事業はもっとスケールが大きい話のはずである。
- プレゼンテーション自体が大切な時代である。今回の説明資料では, 京都のアート・伝統などのルーツと先端産業がどのようにつながっているかがわからず, ナノのデバイスなどの話が生きてこない。どのように和紙とナノがつながっており, どこに先端性があるのかを説明した方が良いのではないか。
- 配布した科学技術のマンガ冊子は, 先端のものづくりは非常に高度な内容であるため, あえて, 小学生・中学生向きに, わかりやすく作ったものである。全国で初の取組であり, 高い評価を得ている。

- 知的クラスター創成事業もそろそろⅡ期が終わりだが、どれだけ成果が出たかを対外的に訴えていかなければいけない。事業開始から10年足らずで成果を出すのは難しいと思うが、現実には成果が求められる。事業費36億円の成果の内訳はどのようなものなのか、ベンチャー企業などで今後伸びそうな企業はあるのかななどを詳しく聞きたい。国の事業が終われば何もかも終わりになるのでは、クラスターの形成とは言わない。国の事業終了後も続いていくことが大切である。
- 3年前に民間から副市長に就任して感じたことがある。消防局や教育委員会では、成果が目に見えやすい。例えば、消防局での火災件数の減少である。しかし、その他の部局では、成果が見えにくいこともあり、目的を達成するための手段が目的化してしまっている傾向がある。
- 今年、京都市産業技術研究所が、京都高度技術研究所などの産業支援機関が集まる京都市リサーチパーク地区に統合した。この絶好の機会を逃さず、何か大きな施策を打ち出せないかと考えている。
- シンガポール、韓国、中国などのアジア諸国では、多くの資金を投入し、規模の大きなクラスターを形成している。規模にとらわれる必要はないが、こうした世界の状況の中で、京都のクラスター形成にはどんな存在意義があるのかを説明する必要がある。
- 今の知的クラスターのような考え方ではいけない。来年の国の予算さえどうなるかわからない状態であり、長期計画を立てても、国の予算がつかなければ事業が終わってしまうという状況である。国の予算はプラスアルファと考えて、京都独自でもクラスターを構築できるように考えていく必要がある。
- まさしくそのとおりである。中国のサイエンスパークなどは省単位でクラスターを形成しており、国がお金を出している例はほとんどない。日本でも地方自治体を中心となってやっていく必要がある。
- そのためには、地場産業を儲けさせ、そこから資金と人材を入れるしか道はない。日本ではどの自治体も赤字でお金を出せるような状態ではない。
- 国は2～3年で成果を出せと言うが、2～3年で成果が出るなら、これまで企業は何

をやっていたのかという話である。そんな短期間では成果は出ない。

- 地場産業がメインになり、京都を活性化させるというシナリオを作っていくことが必要である。

- クラスターが最初にできたのは筑波である。その理由は東京があまりに人口過密であるため、疎開しようという発想である。しかし実態は、大学と研究所を集めただけのクラスターであり、異業種が集まっても、互いに独自に取組をしている。けいはんなも同じような状態であり、研究所団地となっている。

- 京都にもクラスターはある。西陣、室町、清水団地は完全なクラスターである。

- それらと大学が結びつき、新しいものを作ろうというのが知的クラスターである。

- しかし、現実に西陣と大学はつながっていない。
- 京都の産業には、伝統と先端のつながりが強いものもあれば、そうでないものもある。例えば、メッキなど表面コーティングの分野はそのつながりが強い。京都の産業の強みは、アートクラフトなどの細かい作業を要する伝統工芸品と、外から入ってきた先端技術との融合である。

- 京都は多様な企業が存在するため、クラスターを作りやすい環境にある。逆に、大阪は、企業城下町であったため、大企業の下請けが中心であり、クラスター形成には向かない。

- 西陣などの伝統産業は経験による部分が大きく、技術は現場の職人に受け継がれており、外部のものが容易に受け継ぐことができる状況ではない。
- 大学の実験室と現場ではまったく環境が異なり、その違いを乗り越え、大学と伝統産業界をつなぐためには、人間同士のつながりが必要である。
- 目で見て判断する、手で触って判断するというトレーニングは大学ではできない。そ

こが抜けてしまうと京都の産業は沈下してしまう。そこに京都市が力を入れて対策を打つというのも1つの方法ではないか。

- 伝統産業界では、職人がお互いを先生と呼んでおり、あるときは芸術家である。芸術・芸能は利益がなくても良い。国などがお金を出して育てれば良い。しかし、産業というかぎりは、投下した資本以上の利益を得る必要がある。
- 我々は科学技術を中心とした知恵でどう京都を儲けさせるかを考える必要がある。そこに伝統産業が入ってくると難しい。伝統産業でも儲けている人もいるがあくまで一部である。
- 京都の先端産業のほとんどは、世界シェアのトップを持っている。

- なぜ京都にそのようなポテンシャルがあるのかということ、伝統芸能との関連性から検証していくことも必要ではないか。
- 京都のブランド力はすごい。そのブランド力の見える化を図る必要があるのではないか。

- 社会の価値観がどのように産業に関わってきたのか、それこそ大学の先生の研究テーマとすべきである。

- そのテーマを、(財)大学コンソーシアム京都の取組として扱うことも、一つの手法ではないか。
- 京都市の産業振興の政策立案を強化するべきである。現状は、国のプロジェクトありきで、それを京都で行う理由を考えている状態だ。順序が逆であり、京都が中長期的に何をやるべきかを考え、その考えを基に国の資金を取りにいくべきである。

- 西陣織や染めの業界では、神社仏閣などからのニーズはあるが、それ以外のニーズはない状態である。どうすれば産業化できるのかを考える必要がある。
- 西陣織には課題が2つある。1つ目は、機器などの資産が個人所有であり、親族しか使えず、後継者となる子どもがいなければ後に続かないということだ。2つ目は、企画力が弱いということだ。今後は、神社仏閣以外にもどこに需要があるのかを考えていく必要がある。

- 京都市でも、西陣織や清水焼の伝統産業をどう守っていくのかを大学の先生方と一緒に
なって検討して欲しい。
- そのように大学も巻き込んで検討していると、自然と伝統産業と大学の先端技術が
つながっていくのではないかな。
- 京都の先端技術を扱う企業では、伝統産業のノウハウ・知識が活用されている。例え
ば、京都で先端と言われる精密機器を扱う企業のルーツは、仏具製造業である。
- 知的クラスターを提案したのは私である。ある程度同業種が集まった方がコストも下
がって効率的であるし、相互に啓発することもできる。
- 知的クラスターというのは、知を使う産業であると理解している。ぶどうの房に、労
力ではなく、知がぶら下がっている産業であると考えている。

(新・京都市産業振興ビジョン説明後の意見交換)

- よくまとまっているが、まとまりすぎて京都が何をしたいのかよくわからない。アジ
ア諸国は思い切った施策を導入しており、たとえば、韓国の仁川は、アジアのハブ空港と
なっており、ビザなしでも入れる病院などの計画がある。京都を飛躍させる何かに取り
組む必要があるのではないかな。京都市では特区は申請しているのか。
- 国際観光総合特区として、岡崎国際交流・文化観光ゾーン活性化プログラムなどを申
請し、岡崎における様々な規制の緩和などを目指している。また、知恵と人材総合特区
として、「ものづくり拠点・らくなん進都」の整備などを申請し、大学、産業界、公的機
関が交流する施設を整備するという構想を立てている。
- らくなん進都でもっと大きな施策を打ち出せないかな。外部から見て京都らしいという
施策である方が良い。

- 最近、医療観光に注目が集まっている。医療観光は先進的な医療を前提として成り立っているが、京都には重粒子線がん治療などの最先端医療機器がない。そういったものが京都にもあれば、中国などから人を引き付けられるのではないかと考えている。しかし、最先端医療機器を揃えるには何百億という投資がかかるため、京都市だけでは手の打ちようがなく、大手の企業にも参画を呼び掛けている状態である。

- クリニックであれば京都でもできるのではないかと。バンコクやインドなど、医療のクオリティが高く、比較的 low cost に設定されたメディカルツーリズムがあるが、もし京都でやるのであれば、医学的な面だけでなく、精神的な面も含めて、自然に包まれて治すといった観点が重要になるのではないかと。

- 自然にあふれた京北というまちがあるが、ここをハッピーリタイヤや療養の拠点にできないかという話がある。
- 京都の産業界からは、技術支援より、製品の市場はどこにあるのかといった情報支援をして欲しいということを要請されている。知恵産業融合センターでは、そういったマーケティングの面からも支援していきたい。
- アメリカではエコノミックガーデニングという自治体支援手法があるが、そういった手法も参考に、施策を展開していきたい。

- そのためには、外国の市場もよく知っている人材の確保が重要である。

- 京都市産業技術研究所で、何を行っているのかと聞かれたときに、挙げる事例が2つある。1つは漆である。漆は乾きが遅く、脆いという弱点があったが、京都市産業技術研究所では、乾きやすく、堅い漆を開発した。この技術を京都市産業技術研究所のエレベーターのドアに使っている。2つ目に、炭素繊維を織り込んだ西陣織の軽くて強いカバンである。今後は、カバンのデザインの改良を行うとともに、これらの技術に対して市場のニーズがどのくらいあるのかという点を調査していきたい。

- メディカルツーリズムを日本で行うには語学の障害がある。多くの日本の医療従業者は英語が出来ないため、患者との間で必ず問題が起きる。英語ができる人を確保し、意思の疎通がしっかりできるようにする必要がある。

- 少子高齢化は避けて通れないが、悲観的にとらえず、これを逆手にとれば良い。元気な高齢者もたくさんいるということを認識し、高齢者を京都に呼び込む手法を考えるべきである。

- 私が実現したいのが京都サロンである。例えば、100人のサロンメンバーを集める。メンバーは京都に在住している必要はなく、京都が好きという人たちで良い。祇園祭などの重要なイベントの際に優先席を設けたり、自由に催しを開催できるなどの特典をメンバーに与え、京都に人が集まるシステムを作ることにより、京都にお金が流れるようにしていくというものである。
- 富裕層は海外に行く。なぜ京都でお金を使わないのかを考えると、京都で使う場所がないためである。

- 少子化については、京都は小中の教育レベルが高いので、子どもにレベルの高い教育をしたいと考える親を京都に呼び込み、少子高齢化対応型都市を京都で作ってはどうか。

- 京都市では、3つ星ホテルの誘致に力を入れて取り組んでいる。

- ホテルだけでは意味がなく、それとアクティビティがつながるようにする必要がある。また、京都は自転車には対応しているがバリアフリー化はまだままだである。

- 京都のまちをバリアフリー化すれば、京都はもっと活性化される。365日受診可能な脳外科、心臓外科、小児科、産婦人科を市立病院に作るだけでも、子どもを持つ家庭や高齢者が京都にやってくる。

- 神戸は中央市民病院の救急が年間3万を超える。毎日80人くらい来ている計算である。京都も市民病院がもっと頑張る必要がある。
- 高齢者住宅をつくって、看護師と医師を常駐させてはどうか。具合が悪くなったときに、入院が必要なのか、自宅療養で十分なのか判断できる人材がいれば、それだけで安心できるものである。

- 新・京都市産業振興ビジョン（仮称）はこの案を進めるとして，それに加え京都らしい何かを作りたいというのがこの委員会の結論である。